授業科目の概要

（2023年度実施内容。2024年度には一部変更の可能性があります）

共通科目　基幹科目

リハビリテーション理論特論
担当：矢野 秀典／安心院 朗子／會田 玉美／春原 則子

リハビリテーションの理論的体系の歴史的な変遷と構造、特徴について学ぶ。国際生活機能分類（ICF）の考え方に基づき、リハビリテーションの実践を分析し、そのあり方を考察する力を養うとともに、自己の研究目標について理解を深める。

リハビリテーション研究法特論
担当：矢野 秀典／内山 千鶴子／木下 康仁

先行研究のレビュー、研究目的・仮説の明確化、研究計画の作成、方法の選択、結果分析の手法、研究論文のまとめ方、研究倫理の遵守など、リハビリテーションの研究を進める上で基本となる事項を学ぶとともに、調査研究、臨床研究、質的研究などについて、具体的研究例を通して理解を深める。

リハビリテーション包括的支援特論
担当：會田 玉美／新井 武志／内山 千鶴子

すべての人が可能な限り住み慣れた地域で自分らしく生活するために必要な支援・サービスのあり方や、医療・福祉、および行政・住民の協働などについて、リハビリテーション専門職の視点から学ぶ。

リハビリテーション統計学　担当：石橋 裕
リハビリテーション研究で用いられる基本的な統計分析手法を理解する。さらに、医療、保健、福祉分野の論文などから、研究に使われている統計分析法を学び、応用する力を養う。

リハビリテーション医療管理特論　担当：佐藤 広之
リハビリテーション領域の組織およびチームアプローチの特性について理解し、質の高い医療を提供するためにどのような体制が必要であるかを、危機管理やヒューマンエラーに関する知識も深めながら学習する。

共通科目　展開科目

リハビリテーション医学特論
担当：佐藤 広之／仲本 なつ恵／角田 玲子／内山 千鶴子

整形外科疾患、脳血管疾患、耳鼻咽喉科疾患、内科・小児科疾患などのリハビリテーション医学の対象疾患に関する診療技術や研究の進歩について理解する。社会情勢や患者の生活の変化などをふまえ、柔軟な対応のあり方についても学ぶ。

リハビリテーション心理学特論　担当：時田 みどり
リハビリテーションの諸過程において、対象者の心理的側面を適切に理解しておくことが重要となる。本科目では、知覚、注意、記憶、学習、思考、情動などの、基礎的な心の働きについての理解を深める。

リハビリテーション実践モデル特論　担当：小林 幸治
障がいや老いと共に生き、自己効力感の低下や自己同一性の問題を抱える場合、心理社会的アプローチが重要となる。本講義では人間作業モデルを中心に、対象者理解、対象者との協働アプローチについて理解を深める。

リハビリテーション工学特論　担当：工藤 裕仁／花房 謙一
各種補装具・福祉関連機器・環境制御装置などの開発・導入に欠かせない、運動学、運動力学、生体力学、材料工学などリハビリテーション工学の基礎について学ぶ。その上で、障がい者の生活の質（QOL）向上に向けた実証的な研究を展開する。

リハビリテーション教育方法特論　担当：花房 謙一／岡崎 史子
リハビリテーション専門職の養成施設や臨床実習施設における教育方法について学ぶ。学生が自ら学ぶための学修方略、正統的周辺参加と認知的徒弟制といったクリニカル・クラークシップの理論、学習評価、職業教育を療法士と医師の立場から講義・演習を行い、幅広い知識を修得する。

特別支援教育特論　担当：藤本 裕人
「特別支援教育」の教育制度と指導法の基本的な考え方を解説します。また、「対象となる子供」（就学システム）や学校教育の教育的配慮を踏まえて、医療・福祉等と教育との適切な連携の在り方を考えます。

教育原理　担当：峯村 恒平
日本の教育における歴史・制度や指導法について、社会学・心理学・教育学的な視点から学び、「教育」の意味を多角的に捉えた指導者・教育者としての資質や、相手に合わせて指導を行うための知識や技能を養う。

障害者福祉特論　担当：山﨑 順子
障害者基本法の精神に則り、その中軸となる障がい児・障がい者福祉の施策・制度・サービス体系の新しいあり方を学ぶ。そして福祉と関連する教育などとの連携もふまえて、現代障がい者福祉論の課題と可能性を探る。

精神保健福祉特論　担当：井上 牧子（生涯福祉研究科 生涯福祉専攻所属）
日本の精神医療保健福祉の特徴について理解を深め、その上で世界的潮流や動向との比較検討を行い、改めて日本の精神医療保健福祉の課題について考察する。

専門科目　理学療法リハビリテーション分野

理学療法リハビリテーション特論Ⅰ
担当：新井 武志／安心院 朗子

生活習慣病の予防や高齢者の介護予防など、予防的リハビリテーションを実践するために必要な情報や技術を学ぶ。高齢化の進行に伴う社会保障費の増大が社会問題化している現代において、理学療法士に期待される役割について理解する。

理学療法リハビリテーション特論Ⅱ　担当：矢野 秀典／万行 里佳
質の高い理学療法を提供するために必要な基礎知識や技術を身につける。また、少子高齢化の進行、疾病構造の変化、医療技術の進歩など理学療法を取り巻く環境、理学療法の今日的課題や最新の研究事例についても知識を深める。

理学療法リハビリテーション演習Ⅰ　担当：辻 和弘／兵頭 甲子太郎
理学療法リハビリテーション特論Ⅰの内容を受け、予防活動を中心とした理学療法研究を体系化する。過去の研究成果や実践をリサーチし、今後の展開について考察するとともに、修士論文の作成に向け研究のレビューや研究法を学ぶ。

理学療法リハビリテーション演習Ⅱ　担当：小山内 正博／小川 大輔
理学療法リハビリテーション特論Ⅱの内容を受け、最新のトピックや研究事例などを通じて、治療としての理学療法が抱える課題や問題点を解決する力を養う。また、演習Ⅰと同様に研究のレビューや研究法を学び、修士論文作成の準備を進める。

専門科目　作業療法リハビリテーション分野

作業療法リハビリテーション特論Ⅰ
担当：小林 幸治／野村 健太

本来的な作業療法の可能性を追究するには、医学・社会・福祉・教育・職業と幅広い視点を持つことが求められる。本講義では作業療法領域における最新のテーマを学び、今後の社会的ニーズに応えるための知識と専門性を修得する。

作業療法リハビリテーション特論Ⅱ　担当：會田 玉美／香田 真希子
人は多面的な存在であり、その多面性が相互に影響する。本講義では人々の生活の質（QOL）を向上させる作業療法の研究法について論じる。

作業療法リハビリテーション演習Ⅰ
担当：小林 幸治／野村 健太

作業療法学領域の修士論文作成の際によく用いられる調査・研究方法を研究事例と共に紹介する。受講生が自らの研究疑問を明確にし、それを研究デザインに繋げるための準備を行う。

作業療法リハビリテーション演習Ⅱ　担当：會田 玉美／香田 真希子
保健・医療・福祉・教育・労働・行政・企業・司法など幅広いフィールドにおける作業療法の研究を「つながり」の視点から分析する。また社会的な包括支援に貢献するためのさまざまな作業療法の研究について学ぶ。

ハイブリッド型授業の実施　本学では、対面・遠隔を併用したハイブリッド型で授業を実施しています。

専門科目　言語聴覚療法リハビリテーション分野

言語聴覚療法リハビリテーション特論Ⅰ
担当：小林 智子／内山 千鶴子／今富 摂子

聴覚リハビリテーション領域、言語発達領域、発声発語領域をめぐるこれまでの状況を俯瞰し、新たな研究成果もふまえて、言語聴覚療法だけでなくリハビリテーションや療育の視点から議論を深める。

言語聴覚療法リハビリテーション特論Ⅱ
担当：内山 千鶴子／小林 智子／今富 摂子／橋本 幸成

失語症を中心とする高次脳機能障害、言語発達障害、聴覚障害をめぐるこれまでの状況を俯瞰し、新たな研究成果もふまえて、言語聴覚療法だけでなくリハビリテーションや療育の視点から議論を深める。

言語聴覚療法リハビリテーション演習Ⅰ
担当：今富 摂子／後藤 多可志／橋本 幸成／松本 かおり

言語発達障害、発声発語障害、失語症を中心とする高次脳機能障害の各領域における言語聴覚療法の今日的な課題や問題点について最新の知見をふまえ、議論を深める。

言語聴覚療法リハビリテーション演習Ⅱ
担当：後藤 多可志／橋本 幸成／松本 かおり／今富 摂子

失語症を中心とする高次脳機能障害、言語発達障害、発声発語障害をめぐる諸問題について考え、新たな研究成果を取り入れて、対象児者のコミュニケーションや生活を援助する方法を多面的に探る。

専門科目　特別研究

特別研究（理学療法リハビリテーション分野）
理学療法分野における研究論文を作成するために必要な基本的知識を実践的に修得する。国内外の文献検索と講読を通じて研究計画を明確化し、データの収集・分析、結果の解釈と考察を行い、修士論文の完成を目指す。

特別研究（作業療法リハビリテーション分野）
国内外の文献検索と講読、研究課題に基づいた研究計画書の作成、データの収集と分析、結果の考察というプロセスを、段階を踏みながら修得する。その総括として、作業療法リハビリテーション分野に関する修士論文の完成を目指す。

特別研究（言語聴覚療法リハビリテーション分野）
言語聴覚療法の対象となる幅広い領域における臨床活動を見つめ、社会情勢などさまざまな要因により発生する問題点から独自の研究テーマを選択する。資料やデータの収集・分析、結果の解釈・考察を行い、修士論文の完成を目指す。

カリキュラム（修了要件：30単位以上）

科目名			単位数 必修	単位数 選択	配当年次	備考
共通科目	基幹科目	リハビリテーション理論特論	2		1・2	
		リハビリテーション研究法特論	2		1・2	
		リハビリテーション包括的支援特論	2		1・2	
		リハビリテーション統計学	2		1・2	
		リハビリテーション医療管理特論	2		1・2	
	展開科目	リハビリテーション医学特論		2	1・2	6単位以上選択必修
		リハビリテーション心理学特論		1	1・2	
		リハビリテーション実践モデル特論		1	1・2	
		リハビリテーション工学特論		1	1・2	
		リハビリテーション教育方法特論		2	1・2	
		特別支援教育特論		1	1・2	
		教育原理		2	1・2	
		障害者福祉特論		2	1・2	
		精神保健福祉特論		2	1・2	
専門科目	理学療法リハビリテーション分野	理学療法リハビリテーション特論Ⅰ		2	1・2	専攻分野の8単位必修
		理学療法リハビリテーション特論Ⅱ		2	1・2	
		理学療法リハビリテーション演習Ⅰ		2	1・2	
		理学療法リハビリテーション演習Ⅱ		2	1・2	
	作業療法リハビリテーション分野	作業療法リハビリテーション特論Ⅰ		2	1・2	
		作業療法リハビリテーション特論Ⅱ		2	1・2	
		作業療法リハビリテーション演習Ⅰ		2	1・2	
		作業療法リハビリテーション演習Ⅱ		2	1・2	
	言語聴覚療法リハビリテーション分野	言語聴覚療法リハビリテーション特論Ⅰ		2	1・2	
		言語聴覚療法リハビリテーション特論Ⅱ		2	1・2	
		言語聴覚療法リハビリテーション演習Ⅰ		2	1・2	
		言語聴覚療法リハビリテーション演習Ⅱ		2	1・2	
	特別研究	特別研究（理学療法リハビリテーション分野）		6	1～2	6単位選択必修
		特別研究（作業療法リハビリテーション分野）		6	1～2	
		特別研究（言語聴覚療法リハビリテーション分野）		6	1～2	

履修スケジュール例（作業療法リハビリテーション分野1年次の場合）

		Mon	Tue	Wed	Thu	Fri		Sat
1	9:30～11:00	※平日第1～5時限はリハビリテーション学専攻の授業はありません。					1	
2	11:10～12:40						2	
3	13:30～15:00						3	
4	15:10～16:40						4	
5	16:50～18:20							
夜1	18:30～20:00	リハビリテーション 研究法特論	リハビリテーション 包括的支援特論	リハビリテーション 理論特論		作業療法リハビリテーション 特論Ⅰ		
			リハビリテーション 教育方法特論	リハビリテーション 医療管理特論		作業療法リハビリテーション 特論Ⅱ		
夜2	20:10～21:40	リハビリテーション 医学特論	リハビリテーション 工学特論	リハビリテーション 心理学特論		作業療法リハビリテーション 演習Ⅰ		
			特別支援教育特論	リハビリテーション 統計学		作業療法リハビリテーション 演習Ⅱ		

…春学期　…秋学期

担当教員と主な研究分野

※教員の担当科目については『授業科目の概要』(P58・59)をご覧ください。

マークの説明
歴 主な経歴　研 現在の主たる研究領域・テーマ　著 主な著書・論文　理 理学療法リハビリテーション分野
作 作業療法リハビリテーション分野　言 言語聴覚療法リハビリテーション分野　修 学位論文の主指導ができる教員
修士論文の指導については、学生の研究内容により主指導担当以外の教員も論文指導を行います。詳細はオープンキャンパスなどでお問い合わせください。

會田 玉美 AIDA, Tamami　作 修

教授・研究科長 博士(保健科学)

歴 筑波大学大学院修士課程教育研究科カウンセリング専攻リハビリテーションコース修了。東京都立府中病院、同駒込病院、同大塚病院、同豊島病院を経て現職
研 高次脳機能障がい者の社会参加、職場マネジメント。
著「高次脳機能障害者とその主介護者が地域生活に適応するプロセス：困り事の相違から考えられる支援」『目白大学健康科学研究』8号(2015年)｜「作業療法士のコンピテンシーモデルの活用とキャリアコンピテンシー」『東京作業療法』4巻(2016年)｜「高次脳機能障害者の職業リハビリテーションを促進するパンフレットの紹介」『リハビリテーション研究』47巻(2017年)

万行 里佳 MANGYO, Rika　理 修

教授・専攻主任 博士(人間科学)

歴 早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。東邦大学医学部付属大橋病院整形外科等を経て現職
研 糖尿病やメタボリックシンドロームなどの治療および発症予防における行動変容、生活習慣の改善に関する介入研究を行っている。
著 介護予防事業参加者を対象とした運動機能評価と基本チェックリストとの関連について」『日本保健科学学会誌』19巻4号(2017年)｜Intervention using behavior modification techniques to improve the lifestyle of high-risk metabolic syndrome patients. Journal of Physical Therapy Science 32(2), 156-160, 2020.

新井 武志 ARAI, Takeshi　理 修

教授 博士(医学)

歴 筑波大学体育専門学群卒業、北里大学大学院医療系研究科博士課程修了。東京都老人総合研究所流動研究員等を経て現職
研 介護予防および健康増進分野。高齢者(特に虚弱高齢者)のトレーナビリティーと効果的な運動介入方法および高齢者における心身機能評価。
著 The relationship between age and change in physical functions after exercise intervention. Trainability of Japanese community-dwelling older elderly.　The Journal of The Japanese Physical Therapy Association, 2009.

工藤 裕仁 KUDO, Hiroki　理 修

教授 博士(スポーツ医学)、修士(体育学)(スポーツ医学)

歴 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科スポーツ医学専攻修了。大野中央病院、小山整形外科内科、産業技術総合研究所テクニカルスタッフ等を経て現職
研 MRI・MRSを用いた関節軟骨の組成評価と機能評価。弱高気圧酸素酸環境および物理刺激が酸化ストレス・抗酸化力に及ぼす影響について。
著「Magnetization Transfer Contrast (MTC) 効果の定量による等張性膝伸展運動前後の膝蓋軟骨の評価」『スポーツ科学研究』(2006年)｜The Evaluation of Collagen Gel with Various Connection States by Using MRI, Materials Science and Engineering C, 2008.

佐藤 広之 SATO, Hiroyuki　理 修

教授 博士(医学)、修士(人間科学)

歴 東京大学医学部医学科卒業、東京大学大学院医学系研究科外科学専攻リハビリテーション医学修了。国立病院機構東京病院リハビリテーション科等を経て現職
研 障がい者スポーツ、高齢者の健康・体力増進、スポーツ・パフォーマンス向上とリスクマネジメント。
著「障がい者スポーツにおけるクラス分け―選手・コーチの視点を中心に」『作業療法ジャーナル』52巻10号(2018年)｜「すべての人にスポーツを～医療から地域への橋渡し～理学療法士・作業療法士養成施設における2020年問題」『リハビリテーションスポーツ』38巻1号(2019年)

矢野 秀典 YANO, Hidenori　理 修

教授 博士(障害科学)

歴 東北大学大学院医学系研究科病態運動学専攻博士課程修了。横浜総合病院リハビリテーション科長、仙台医療技術専門学校専任教員等を経て現・目白大学保健医療学部長
研 高齢者全般を対象とした健康増進ならびに介護予防に関する研究。学生を対象とした健康教育に関する研究。
著「虚弱高齢者の余暇活動―旅行活動に主眼をおいて―」『目白大学健康科学研究』9号 17-22 (2016年)｜『理学療法NAVI“臨床思考”が身につく運動療法Q&A』分担執筆(2016年 医学書院)

安心院 朗子 AJIMI, Akiko　理

准教授 博士(学術)

歴 筑波大学人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻後期博士課程修了。創造会メディカルプラザ平和台病院等を経て現職
研 高齢者・障がい者の交通バリアフリーに関する研究。子どもに関する研究(障がい児における保育活動、子どもの身体運動など)。
著「若年脳損傷者の外出における主介護者の介護負担感」『日本公衆衛生誌』59巻1号(2012年)｜『高齢者の外出を支える移動支援機器に関する研究―歩行補助車およびハンドル形電動車いすの使用の現状から課題を探る―』(2014年 文化書房博文社)

小川 大輔 OGAWA, Daisuke　理

准教授 博士(理学療法学)

歴 首都大学東京大学院人間健康科学研究科理学療法科学域博士後期課程修了。医療法人社団瑞幸会千川篠田整形外科での勤務を経て現職
研 徒手的理学療法のエビデンスに関する研究。
著「超音波画像を用いた正常膝関節の持続牽引に伴う離開距離の解析―牽引時間と牽引強度の違いが及ぼす影響について―」『理学療法学』43巻1号(2016年)｜『そのとき理学療法士はこう考える―事例で学ぶ臨床プロセスの導きかた―』共著(2017年 医学書院)

小山内 正博 OSANAI, Masahiro　理

准教授 博士(保健医療学)

歴 国際医療福祉大学大学院博士課程修了。植草学園大学教授を経て現職
研 急性期理学療法や呼吸理学療法に関心を持ち大学病院や総合病院で臨床を行ってきた。研究としては慢性閉塞性肺疾患患者の姿勢の影響についての研究、近年は、呼気筋トレーニング効果、姿勢と肺気量位の関係、腹圧・換気パターンと肺メカニクスの関係に関心を持っている。
著「坐位姿勢の違いが側腹筋の筋厚と筋活動に及ぼす影響」『理学療法科学』25巻1号(2010年)｜「慢性呼吸不全患者の立位姿勢は運動耐容能に反映される」『植草学園大学研究紀要』8巻(2016年)

辻 和弘 TSUJI, Kazuhiro　理

准教授 修士(保健医療学)

歴 急性期病院での臨床経験を経て現職
研 呼吸リハビリテーションに関する研究。
著「呼吸介助による増加換気量の持続効果の検証」『日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌』20巻(2010年)｜「スプリンギングによる増加吸気量の検証」『日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌』21巻(2011年)

兵頭 甲子太郎 HYODO, Kashitaro　理

准教授 博士(医学)

歴 国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科修士課程修了。春日部厚生病院リハビリテーション科を経て現職
研 地域理学療法、日常生活活動学。主な研究テーマとして、地域高齢者の活動量と臥床時間との関係、日常生活動作における下肢の動作解析に取り組んでいる。
著「一側下肢への荷重量変化に伴う股関節周囲筋の筋活動変化について」『理学療法科学』23巻5号(2008年)｜『地域理学療法にこだわる』共著(2010年 文光堂)

小林 幸治 KOBAYASHI, Koji　作 修

教授 博士(作業療法学)

歴 国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院卒業、首都大学東京大学院人間健康科学研究科修了。横浜市立脳血管医療センター、ふれあい町田ホスピタルを経て現職
研 脳血管障がい者の心理社会面への援助メソッドに関する研究、診療参加型臨床教育に関する研究、高齢者の健康増進プログラムに関する研究など。
著「脳卒中者は病前との連続性を回復する際に作業療法をどのように意味づけているか」『作業療法』31巻(2012年)｜『作業療法研究法第2版』共著(2012年 医学書院)｜『作業療法のクリニカル・クラークシップガイド』編著(2017年 三輪書店)

時田 みどり TOKITA, Midori　作 修

教授 博士(学術)

歴 お茶の水女子大学文教育学部卒業、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修了。お茶の水女子大学研究員、目白大学保健医療学部作業療法学科教授
研 1. リスク認知と意思決定の情報処理過程 2. 知覚・認知・運動の相互作用 3. 知覚運動学習における教示の効果
著「教職のための心理学」(2013年 ナカニシヤ出版)｜Evidence for a global sampling process in extraction of summary statistics of item sizes in a set. *Frontiers in Psychology*, 7 (711) 1-13, 2016.｜「理想的観察者モデル入門―基本的な考え方と適用方法―」『基礎心理学研究』36巻1号(2017年)

花房 謙一 HANAFUSA, Kenichi　作 修

教授 博士(保健学)

歴 神戸大学大学院保健学研究科博士後期課程修了。奈良県心身障害者リハビリテーションセンター、大阪大学医学部附属病院、地方独立行政法人市立吹田市民病院リハビリテーション科参事を経て現職
研 基礎作業学および疾病後の過ごし方(時間の使い方)と疾病の回復に関する研究をライフワークとしている。
著 Effect of Instrumental Activity of Daily Living Training on Physical Activity Levels in Japanese Women Who Underwent Total Hip Arthroplasty. Bulletin of health sciences Kobe, Vol.33, 2018.

仲本 なつ恵 NAKAMOTO, Natsue　作

教授

歴 筑波大学医学専門学群卒業。同大学小児科、国立小児病院(現国立成育医療研究センター)神経科、帝京大学医学部小児科、東京都児童相談センター等を経て現職
研 発達障害の理解と支援に関する研究。そのほか、小児神経疾患に関する臨床研究。
著「発達障害をめぐる教育と医療の連携」『人と教育』5巻(2011年)｜Cyclic vomiting syndrome in infants and children : a clinical follow-up study. Pediatric Neurology 57:29-33, 2016.｜『言語聴覚士のための基礎知識 小児科学・発達障害学 第3版』共著(2019年 医学書院)

香田 真希子 KOUDA, Makiko　作

准教授 博士(社会福祉学)

歴 国立療養所東京病院付属リハビリテーション学院卒業。長谷川病院、ACT-Jプロジェクト、地域精神保健福祉機構COMHBO・ACT-IPSセンター等を経て現職
研 精神保健従事者の態度変容を伴う人材育成のあり方に関する研究、障害者就労移行支援に関する研究、ACT/IPSなどのリカバリー志向のプログラムに関する研究などを行っている。
著「IPSブックレット2 就労支援マニュアル 実践ツール集」(2012年 地域精神保健福祉機構・コンボ)｜「精神保健従事者を対象とするリカバリーに焦点を当てた包括型地域生活支援プログラム研修の効果」『作業療法』32巻(2013年)

春原 則子 HARUHARA, Noriko　言 修

教授 博士(行動科学)

歴 筑波大学大学院教育研究科カウンセリング専攻リハビリテーションコース修了。済生会中央病院リハビリテーション科副主任等を経て現職
研 失語症の症状・セラピー、発達性dyslexiaの発現機序・指導法の開発、SLIなど。
著「典型発達児における音読の流暢性の発達と関与する認知機能についての検討―発達性dyslexia評価のための基礎的研究―」『音声言語学』52巻3号(2011年)｜『動画と音声で学ぶ 失語症の症状とアプローチ』(2017年 三輪書店)

今富 摂子 IMATOMI, Setsuko　言

准教授 博士(医学)

歴 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。昭和大学医学部形成外科、埼玉県立小児医療センター等を経て現職
研 発声発語障害の症状、評価、訓練に関する音声学・音韻論的研究。
著 Effects of breathy voice source on ratings of hypernasality. Cleft Palate Craniofac J, 2005.｜「気管切開言語外来を受診した症例の発話の問題」『埼玉小児医療センター医学誌』25巻1号(2009年)｜『クラタリング[早口言語症]』共訳(2018年 学苑社)｜『発声発語障害学 第3版』共著(2021年 医学書院)

松本 かおり MATSUMOTO, Kaori　言

専任講師 修士(言語学)

歴 上智大学外国語学研究科言語聴覚研究コース修了。のぞみ病院、旭川リハビリテーション病院、さいたま市民医療センター等を経て現職
研 音声障害の予防、発声訓練における効果的な呼吸法の検討など。
著「健常例における臥位姿勢での呼吸および発声・発話の特徴についての検討」『Sophia University Working Papers in Phonetics』(2012年)｜「職業の違いによる音声障害のリスクについての検討」『音声言語医学』56巻4号(2015年)

野村 健太 NOMURA, Kenta　作

専任講師 博士(作業療法学)

歴 目白大学保健医療学部卒業、目白大学大学院修士課程修了、東京都立大学大学院単位取得後退学。慈誠会徳丸リハビリテーション病院等勤務、目白大学助教を経て現職
研 主なテーマは地域在住男性高齢者の社会的孤立を予防するためのプログラム開発、クリニカル・クラークシップ(CCS)に基づく作業療法臨床教育に関わる研究。
著 Developing a Group Program for Older Males to Participate in Social Activities in Japan: A Mixed-Methods Study. American Journal of Men's Health, Vol.15(2)1-14,2021.｜『作業療法のクリニカル・クラークシップ(CCS)ガイド』共著(2017年 三輪書店)

角田 玲子 TSUNODA, Reiko　言

教授 博士(医学)

歴 東京医科歯科大学医学部卒業。埼玉県立がんセンター、関東逓信病院等の耳鼻咽喉科勤務を経て現職
研 めまい平衡障害の臨床研究。内耳性、小脳障害などの中枢性めまいのほか、前庭性片頭痛、持続性知覚性姿勢誘発めまいなどの診断・治療を研究。内服治療だけでなく理学療法や心理療法を取り入れたチーム医療を行っている。
著「The furosemide test and vestibular status in Meniere's disease」『Acta Otolaryngol(Stockh)』118巻157-160(1998年)｜『耳鼻咽喉科疾患ビジュアルブック』共著(2011年 学研メディカル秀潤社)｜『前庭障害に対するリハビリテーション』共著(2019年 メジカルビュー社)

小林 智子 KOBAYASHI, Tomoko　言

准教授 博士(医学)

歴 金沢大学大学院医学系研究科感覚運動病態学専攻修了。日鋼記念病院リハビリテーションセンター、広島大学歯学部附属病院を経て現職
研 高齢者の日常生活におけるきこえの問題点を抽出し、難聴高齢者の生活障害の予防と対策について。聴覚障がい児の言語獲得法。
著「自立高齢者における主観的きこえとQOLの関係」『老年社会科学』34巻2号(2012年)｜『図解 言語聴覚療法技術ガイド』共著(2014年 文光堂)

峯村 恒平 MINEMURA, Kohei　言

専任講師 修士(教育学)

歴 横浜国立大学大学院教育学研究科修了。目白大学高等教育研究所助教等を経て現職。現・目白大学人間学部児童教育学科専任講師
研 近現代社会史の視点から現代の意味を捉え「今日求められる教育とは何か」について、教育社会学、キャリア教育学の分野を中心に、幅広く研究を進めている。
著「「塾」が都市部高校生の進路選択行動に及ぼす影響に関する一考察」『目白大学心理学研究』13号(2017年)｜「時代と産業と教育の変化に関する試論―社会史からみた今日の教育政策」『人と教育』14号(2020年)

内山 千鶴子 UCHIYAMA, Chizuko　言 修

教授 博士(教育学)

歴 筑波大学大学院博士課程心身障害学研究科修了。石川県立中央病院リハビリテーション部、石川県精神衛生センターを経て現・目白大学言語聴覚学科教授
研 発達障害児・者の言語発達障害に関する研究。
著「学童期―言語発達の評価と支援」『言語発達障害学』(2010年 医学書院)｜「文字を用いた自閉症児の発語指導―認知特性の違いから示唆される指導方法の差―」『言語聴覚研究』18巻(2011年)｜「自閉症児の共同注視と言語発達」『高次脳機能障害学』33巻(2013年)｜『言語聴覚士のための臨床実習テキスト―小児編』編著(2017年 建帛社)

後藤 多可志 GOTO, Takashi　言 修

准教授 博士(心身障害学)

歴 筑波大学大学院人間総合科学研究科修了。厚生労働省感覚器障害(聴覚)戦略研究流動研究員、筑波大学大学院人間総合科学研究科客員研究員等を経て現職
研 発達性読み書き障害の発現機序や支援に関する研究。
著『特別支援教育における学校・教員と専門家の連携』(2022年 ジアース教育新社)｜「ユニバーサルデザインデジタル教科書体が発達性読み書き障害児の音読の正確性、流暢性および読解力に与える影響」『音声言語医学』(2023年)｜Word Sound Retrieval Abilities in Japanese Children With Developmental Dyslexia. APJDD, 7(2): 235-247, 2020.

橋本 幸成 HASHIMOTO, Kosei　言

専任講師 博士(行動科学)

歴 医療法人室原会菊南病院、JCHO熊本総合病院での勤務を経て現職。社会人大学院生として熊本県立大学大学院にて修士号、筑波大学大学院にて博士号を取得
研 失語症および高次脳機能障害を有する脳損傷者の症状分析、評価法ならびに訓練法に関する研究を行っている。
著「失語症者のオノマトペ使用に関して」『言語聴覚研究』11巻4号(2014年)｜A patient with aphasia using the nonsemantic lexical route for Kanji reading, Neurocase, Vol.23(5-6), 2017.｜「同音擬似語を用いた語彙性判断による文字列レキシコンの評価―失語症臨床への応用に向けて―」『言語聴覚研究』15巻4号(2018年)

非常勤講師

石橋 裕	東京都立大学大学院人間健康科学研究科准教授
岡崎 史子	新潟大学医学部医学科 医学教育学分野担当 教授、医学教育センター 副センター長、岐阜大学医学部 客員教授
木下 康仁	聖路加国際大学大学院看護学研究科特任教授
藤本 裕人	帝京平成大学人文社会学部児童学科教授
山﨑 順子	元・東京都発達障害者支援センター センター長 元・国際医療福祉大学大学院教授